**説教20240407ヨハネ20：19-31「幸いな人」**

**主イエス、ご復活有難う。**

**ちょっと耳慣れない言い回しに聞こえますが、私は、イースターを迎えてこの様に言いたいです。**

**この私に、復活された主イエスによって、新しい命が与えられ、新しい日々が与えられました。ほかでもないこの私に。**

**他でもないこの私が、最後まで永遠に生かされ続けるという希望は、大きな喜びであると同時に、時には重いことでもあるでしょう。私は主イエスと共に生かされる時、他でもないこの私から最後まで逃れることが出来ません。罪を犯す自分がその都度許されることがなければ、私は、そんな重い永遠の命から逃げ出そうとするかもしれません。しかし、主イエスは、幸いな人であります。その都度、私に現れて、「平和があるように」と宣言されて、罪から救い出して、新しい命をお与えになります。**

**私たちは、この様にイエス様と出会い、再び、新しい命に生かされるために、今ここに集められています。**

**さて、今日出て来ますトマスが、復活された主イエスが本当に主イエスなのかという事にとことんこだわった、という事は良くもあり又、悪くもあることでしょう。復活した主イエスが本当に主イエスであるのかを、自分で確かめたいという事は、この私が、私自身であることと同様に、大切で、疎かには出来ないことでしょう。復活される自分が、自分自身であることが、何より大切であるように。**

**しかし、トマスは、主イエスの手と脇腹に残されたしるしにも、とことんこだわっています。それは25節でのトマスの発言に現れています。**

**「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」他の聖書訳によると次の様になります。「俺は、彼の両手に釘の跡を見て、自分の指をその釘跡の中に突っ込み、俺のこの手を彼の脇腹の中に突っ込んででもみない限り、絶対に信じたりはしない」（岩波訳2023）こちらの訳のほうが、トマスの頑固さや高慢さや偏りを、明らかに言い表している様です。明らかにこの時のトマスは、罪に陥ろうとしているのです。**

**このトマスが陥ろうとしていた罪は、わたしたち現代人にとっても陥りやすい罪であります。わたしたちは神の業を信じないで、人間の業に頼ろうとする時代に生きています。何でも見える化して、科学の名のもとに実証し、人間によるマニュアルを作成すれば、この世界は幸せになる、と考えることは十分ではありません。**

**しかしそんなトマスも、主イエスとの出会いによって、たちまち、その罪が赦され、幸いな人になることが出来ました。今日はその成り行きを見て参りましょう。**

**その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけて言いました。イエスの弟子たちは、ユダヤ人から命を狙われ、とても怯えていました。そうして自分たちの家の中に息をひそめて閉じこもっていました。**

**この時の様子は、信者が集う教会の様子に喩えられるかも知れません。そしてその教会は危機に瀕しています。そもそも、教会は外に向かって分け隔てなく、門戸を開いている場所でありますが、時としてこの様に、何かに怯えて、門戸を閉ざし、内向きになって、息をひそめて元気を失くしてしまう時期を迎えることもあるでしょう。内向きになると、その内、その集団が内部崩壊してしまうという危険もあります。**

**でも、その危機的状況を救って下さるのも又、主イエスであります。私たちは、どんな時でも、主イエスに全てを委ねて、お任せするときにこそ、救われるのです。**

**そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。**

**イエスは、その家の戸に鍵がかかっているのをものともせずに、家の中に入られ、弟子たちの真ん中に立たれました。家の戸に鍵がかかっているというのは、弟子たちの心が閉ざされていることの喩えです。イエスはそんな弟子たちの心に、すんなり入られ、内側からかかっていた鍵を開けられたのでした。それで、弟子たちは自分の中に主イエスをお迎えして、自分の心が解放されて、喜んだのでした。弟子たちは、丸ごとの主イエスを見て喜び、彼の手と脇腹の傷からは、恐らく目を背けたのではないでしょうか。その手と脇腹の傷は、人間の罪のしるしなのですから。**

**私たちは、教会の頭としてのイエス様と出会うとき、イエス様の丸ごと全体とお会いしているのです。それは全人格とか全体像とか言い表せるかも知れません。それは私たちには捉えきれない、つかみきれないイエス様と言う大きな存在です。私たちは、その大きなイエス様に心も体も委ね切るとき、どんなみ言葉でも、幸いに聴き取ることが出来ます。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、主イエスは、彼らに息を吹きかけて言われました。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」**

**さて、トマスは、この弟子たちの集まりから、一人はぐれていました。その成り行きは、ヨハネ福音書 11章 16節のヨハネの発言から類推することが出来ます。**

**ヨハネ福音書 11章 16節**

**すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。**

**「一緒に死のうではないか」と言うのは自分の意志ですから、聖書的ではありません。なぜなら死と言うのは自分から行うことではなく、主から与えられることだからです。トマスは「一緒に死のうではないか」と仲間の弟子たちに言ってから、弟子たちとはぐれて、一人で歩んで行ったと推察されます。**

**そのトマスが再び弟子たちと合流し、一緒に居ることになりました。そこで他の弟子たちはトマスに、「わたしたちは主を見た」と、恐らく喜びながら言いました。しかし、トマスはそれに対して、「俺は、彼の両手に釘の跡を見て、自分の指をその釘跡の中に突っ込み、俺のこの手を彼の脇腹の中に突っ込んででもみない限り、絶対に信じたりはしない」と答えたのでした。**

**トマスのイエス様に対する熱心さは善いことですが、それでも尚、その熱心さが一人歩きをして、丸ごと全体のイエス様を見失ってしまうという、トマスの罪ある姿がここには記されています。では、そのトマスの罪を主イエスはどのようにしてお赦しになったのか、みて参りましょう。**

**さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。**

**このイエス様が来られた成り行きは８日前と全く同じですが、そこにトマスが加えられていたという事が、８日前と違います。この様に、教会とは、主の計画によって新しいメンバーが増し加えられていくところであります。**

**主イエスの御言葉は、それを受け取る者を誰一人疎かにはされず、放っておかれません。**

**主イエスはここでトマスに対して、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と言われました。主イエスはなんでもご存知の方ですから、先日、トマスが仲間の弟子たちに対して「おれは、、、絶対に信じたりはしない」と言ったのを知っておられたのです。主イエスの畏れ多さがここにありますが、そんな主イエスは全てを承知の上で、トマスに、自分の手を使って、手と脇腹の傷を確かめて見なさいと言われたのでした。ここに憐み深い主イエスがおられ、その憐れみによって、トマスは自分の罪が打ち砕かれ、罪から解放され、自分の罪を赦されたのでした。丸ごと全体の主イエスを信じることからトマスを遠ざけていたのは、まさにこの罪だったのでした。**

**トマスは罪赦され、主イエスに答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。**

**これにて、トマスに対する主イエスの、罪の赦しの業が成ったわけですが、それで終わらないのが主イエスの恵みであります。**

**イエスはトマスに言われました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」将にイエス様は恵みの上に恵みを、次から次へお与えになられる方です。そして、心と体をイエス様に委ね切っている人は、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けることが出来るのです（ヨハネ1章）**

**「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」という御言葉は、トマスに向けての御言葉でありますが、もちろん彼だけにではなく、全ての人々、今を生きる私たちにも向けられている御言葉です。私たちは、この地上において、今、主イエスの姿を丸ごとこの目で見ることが出来ないかも知れません。出来るかも知れません。この地上で、主イエスとお会いしてその姿を見ることが出来る時、私たちはこの上ない喜びで満たされます。**

**しかし、イエス様と顔と顔とを合わせる出会いを、最後の完成の時迄待ち望みながら、この地上を歩んで行くことも又、幸いであります。あなたの言っていることによると、どっちに転んでも喜びであり幸いであるという事ですねと、言われそうですが、私たちはイエス様から、恵みの上に更に恵みの御言葉を受け取ることによって、そのような者にされて、この地上を歩んでいるのです。**

**ヨハネ福音書 20章 31節**

**これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。**

**12弟子の一人であるトマスに、主イエスはこの様に特別に現れて下さって、彼の罪を赦し、復活の命に生きる者として下さいました。ここに集う私たち一人ひとりも、トマスの様にそれぞれの個性や特徴を持っています。そして、主イエスはその一人ひとりのことを恐れ多くも全てご存知であり、その罪をどうにかして赦そうとしておられます。どうか私たちが、憐み深い主イエスを信じて、自分の心と体を主イエスに委ね切る歩みを続けていくことが出来ますよう祈り願います。**